ひめゆり平和祈念資料館

# 資料館だより

## 目　次


●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・1
県外巡回展「ひめゆり　平和への祈り［沖縄戦から65年］」はじまる／かわら美術館にて内覧会開催／県外巡回展開催記念イベント／県外巡回展展示構成／開館20周年記念誌発行／「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」が終了／特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」終了／平和のための博物館・市民ネットワーク第9回全国交流会参加
●2010（平成22）年度の事業紹介　・・・・・・・・8
●相思樹（コラム）・・・・・・・・・・・・・・・・8
●統計に見る2009年度・・・・・・・・・・・・・・9
●仲宗根政善日記抄(42)・・・・・・・・・・・・・11
●本棚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・15



第45号
2010.5.31

# 資料館トピックス

## ◆県外巡回展「ひめゆり平和への祈り　[沖縄戦から65年]」はじまる

県外巡回展「ひめゆり　平和への祈り［沖縄戦から65年］」が、2010年4月3日、愛知県高浜市やきものの里かわら美術館からスタートしました。この展示会は、戦後65年目の節目に、ひめゆりの戦争体験と平和への思いを県外に発信するために、朝日新聞社・各開催館と共催で、開催することになったものです。開催館と開催期間は下記のとおりです。

| | |
|---|---|
| 高浜市やきものの里かわら美術館（愛知県） | 2010年　4月　3日～　5月16日 |
| 長野県立歴史館（長野県千曲市） | 2010年　5月29日～　7月11日 |
| 四日市市立博物館（三重県） | 2010年　7月21日～　9月　5日 |
| 水戸市立博物館（茨城県） | 2010年　9月19日～10月24日 |
| 大阪人権博物館（大阪府） | 2010年11月16日～12月26日 |

## ◆かわら美術館にて内覧会開催

2010年4月2日、高浜市やきものの里かわら美術館での巡回展開催にさきがけ、内覧会が行われました。

当日は、あいにくの寒さではありましたが、高浜市の教育関係者や報道関係者、巡回展関係者、平和博物館関係者など約150人の方が参加されました。かわら美術館館長井口善晴氏、高浜市長吉岡初浩氏、朝日新聞名古屋本社編集局長田中英也氏がごあいさつを述べられ、当財団理事長であり、ひめゆり学徒生存者の本村つるからもあいさつがありました。

その後参加者は本村の案内で展示会場を見学しました。第1章では楽しかった学校生活や当時の制服、学校模型などで学校の様子を紹介し、「私もへちま襟を着たのよ」という参加者の声も聞かれました。そして第2章の戦場に持って行った学用品の展示では「みんなすぐ帰れると思って学用品を持って行った。私は宿題があったので硯を持っていきました」と説明がありました。参加者の中には、証言映像を熱心に見たり、証言本をゆっくり読む姿も見られました。

約40分間の案内でしたが、随所で参加者からの質問があるなど双方向のやりとりがあり、終始和やかな雰囲気で、県外巡回展の幸先のいいスタートとなりました。

展示の準備作業が前日まで行われた

かわら美術館での内覧会の様子

展示を案内する本村理事長

## ◆県外巡回展開催記念イベント「次世代に平和への思いをつなぐトーク＆ミニコンサート」

4月27日、愛知県の名古屋市芸術創造センターにて、県外巡回展開催記念イベントが行われました。当日の名古屋は悪天候でしたが、幅広い年代の方、約600人が足を運んで下さいました。

第1部は元ひめゆり学徒生存者の講演で、当館証言員の島袋淑子が、負傷兵の看護や友達の死などといった戦場での体験を話しました。亡くなった友達の残した「私はもう助からないから、他の人を治療してあげて」という話には目頭にハンカチを当てる方もおおくいらっしゃいました。

つづいて琉球朝日放送の比嘉雅人さんの進行でトークが行われました。出演者は当財団理事長の本村つる、証言員島袋淑子、THE BOOMの宮沢和史さんです。宮沢さんは「島唄」をつくった方です。島袋は資料館が出来てから、私たちが伝えなければと思った、という思いを話し、本村からは館設立までの経緯と、次につなぐための取り組みの紹介がなされ、宮沢さんは「島唄」をつくったときの思い、アウシュビッツミュージアムでの体験などを話されました。進行の比嘉さんからも「戦争はつい俯瞰で考えがちだが、私たちは亡くなった一人びとりに物語があることを忘れてはいけない」との言葉が聞かれました。

第2部のコンサートでは宮沢さんが「沖縄に降る雪」「白百合の咲く頃」「島唄」「風になりたい」などを披露しました。ひめゆりから感じたことや島唄の歌詞の意味なども話し、「ここに来た人たちも、自分ができることをやっていってほしい。そうすればここに来た甲斐もあったのではないかと思います」との投げかけもありました。

終演後はアンケートを熱心に書いている光景が見られました。講演、トーク、コンサートがそろって行われたことで、来場者の心にもより深く刻みつけられたものがあったようです。

開場を待つ参加者

島袋証言員の講演の様子

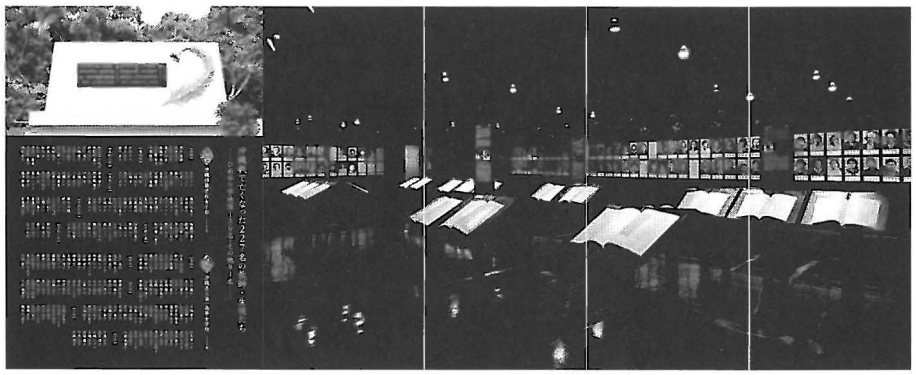
THE BOOM 宮沢和史さんを交えてのトーク

## ◆県外巡回展展示構成

巡回展　ひめゆり平和への祈り　［沖縄戦から65年］

動員
240人
アジア・太平洋戦争
と沖縄
1931—1945
1942—1945

南部への撤退
5.25
5.26—6.18



証言員として
あれから
65年
つなぐ

## ◆開館20周年記念誌発行

当館が開館20周年を迎えた昨年は、節目の年としてさまざまな記念事業が行われました。その一環として『ひめゆり平和祈念資料館20周年記念誌　未来へつなぐひめゆりの心』を発行しました。

同書は、資料館建設活動から開館後の20年間の歩みをまとめたものです。

第1章は20年の活動の軌跡を写真や統計、感想文などを通して振り返り、第2章は歴代館長・証言員（ひめゆり学徒生存者）のプロフィールや証言員の文章、第3章では設立準備から現在までの証言員の思いを座談会として掲載しています。第4章「ひめゆり平和祈念資料館のこれから」で次世代につなぐための試みや資料館職員の声を紹介、そして第5章には「開館20周年記念事業」を掲載しました。また、資料編として、沿革や20年間の関連新聞記事の抜粋、当館の刊行物の紹介、機構の変遷も収録いたしました。

活動の経過をまとめるだけではなく、資料館開館に尽力し、開館後も長きにわたって資料館を支えつづけてきた証言員の生の声を掲載したのが特長です。第2章の歴代館長・証言員のプロフィールや証言員としての活動を振り返った手記および第3章の座談会などからは、証言員の平和への思い、資料館への思い、次世代への思いを読み取ることができます。

お問い合わせはひめゆり平和祈念資料館（098-997-2100）まで。

20周年記念誌目次

◆ごあいさつ／本村つる・石橋芳子
◆20周年に寄せて／中山良彦氏・仲程昌徳氏・柴田昌平氏・岡部憲明氏・大城和喜氏
◆第1章　資料館20年の歩み
第1節　写真で見る資料館の歩み　第2節　統計に見る20年の歩み　第3節　20年間に寄せられた声
◆第2章　ひめゆりの証言員
第1節　歴代館長・証言員のプロフィール　第2節　証言員としての20年
◆第3章　開館20周年記念座談会
◆第4章　ひめゆり平和祈念資料館のこれから
1. 次世代プロジェクト　2. 受け継ぐために　3. つながるために　4. 受け継ぐ者として
◆第5章　開館20周年記念事業
1. ひめゆりの塔改修・塔域環境整備　2. 館内の改装　3. 特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」　4. 平和講演会　5. レクイエムコンサート　6. 元ひめゆり学徒の戦争体験講話　7. 平和学習教材「沖縄戦とひめゆり学徒」を寄贈　8. 伊原第一外科壕学術調査　9.『ひめゆり平和祈念資料館開館20周年記念誌　未来へつなぐひめゆりの心』　10. 20周年に関する新聞記事
◆資料編
1. 沿革　2. 機構の変遷　3. 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会職員
4. 20年間の関連新聞記事（抜粋）　5. 感想文の統計　6. イベント・企画展チラシ　7. 刊行物

## ◆「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」が終了

2008年11月に開始した「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」が、2009年12月2日、終了しました。

「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」は、「証言員」(当館展示室内で証言を行っているひめゆり学徒生存者)一人ひとりの戦場体験を、現地で詳細に聞きとっていこうという趣旨のもと実施されたものです。

朝9時頃に出発し、南風原の沖縄陸軍病院から南部一帯の戦場体験の現場を1日かけて巡りながら、証言を聞き、その様子を撮影・記録しました。

1か月に2人ほどのペースで実施しましたが、夏の暑い時期は実施を避けたこともあり、17人の証言員の戦跡めぐりを行うのにおよそ1年かかりました。

証言員と職員は、普段資料館で一緒に仕事をしていますが、これまで一人ひとりの証言員の戦場体験を、じっくり1日かけて聞くという機会はなかなかありませんでした。今回はその貴重な機会となりました。また、体験したその場所で聞くことで、より具体的な場所の確認をすることなどもできました。

さらに、戦跡めぐりのプランを考えたり、インタビューの方法、写真やビデオの撮影・録音をどのように行うかなど、さまざまなことを学ぶ機会ともなりました。

今回の戦跡めぐりで収録された音声や映像資料は資料館にとっての大切な記録資料となっています。

## ◆特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」終了

昨年6月1日に始まった特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」が3月31日に終了しました。10か月の期間中、ひめゆり同窓会東京支部、中部ひめゆり同窓会、ひめゆり同窓会糸満支部、また、各学年の同期会で足を運んで下さるなど、計132人の同窓生が来館。学校模型の前で「私は寮のこの部屋

だったのよ」「私の１年の時の教室はここ」という話が聞かれたり、写真の前では「これは〇〇さんでしょう」「いや、△△さんよ～」などと弾む声が上がりました。

明治時代に設立された女師・一高女は、沖縄戦による廃校までに約7,200人余の卒業生を輩出した沖縄の女子教育のさきがけと言える学校で、同窓生たちは、戦後も女師・一高女生だという誇りを抱きつづけてきました。今回の企画展は、学校を消滅させ生徒たちの命を奪った戦争の愚かさを伝えるにとどまらず、同窓生にとっては、自らのアイデンティティを確認する展示会としてとして受けとめられたようです。

また、一般の来館者や修学旅行団体の見学も多く、映像や制服のレプリカを熱心に見ている高校生の姿や、女子学生の写真を自分の生徒と重ねてしまうという教員の感想もありました。

在りし日の学校の模型を見る東京支部のメンバー

展示を見る1945年当時の予科２年生

中部ひめゆり同窓会17人で来館

## ◆平和のための博物館・市民ネットワーク　第９回全国交流会参加

平和のための博物館・市民ネットワークの第９回全国交流会が2009年12月５日・６日に東京文京区の文京区民センターでひらかれ、当館学芸課の普天間朝佳と仲田晃子が参加しました。全国から30名余りの参加者がありました。

１日目は、①平和博物館で伝える―体験をどのように継承するか、②平和博物館での研究活動とその継続、③平和博物館の現況を考える、の３つのテーマに沿って３者の報告と自由討論が行われました。２日目も３者の報告と、参加者が関わっている各館の事業や活動の紹介が行われました。

１日目には、普天間が、「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承の取り組み」と題して、当館の次世代継承の試みについて報告しました。

継承をテーマにした場合、次世代（若者）の側に焦点があたりがちですが、当館は戦争体験者が主軸となって運営されており、体験者による資料館づくりと資料館活動に焦点をあて、写真なども使いながら紹介しました。また、元ひめゆり学徒生存者と戦争体験のない職員とが、一緒に仕事を行っていることも具体的に紹介しました。当館にとっての「継承」とは、戦争体験や体験者の平和への思いを引き継ぐだけではなく、体験者による「伝える活動」の経験も継承していくことでもあること、また、資料館そのものを大切に引き継いで行くことが重要である点も強調し報告しました。

参加者からは、体験者と体験のない職員とがともに仕事を行っていることに対し、このこと自体がとても重要な継承活動になっている、大変うらやましい、などの感想をいただきました。また、討論の中では、戦争体験を伝えようとするとき、体験者自身も伝える活動の中で学びながら変化していることなどが話題になりました。

報告をしたことで、当館の活動についての意見や感想を聞くことができ、背中を押していただいたように感じたと同時に、よりよい仕事をしていこうと気持ちが引き締まりました。また、各館の活動報告から、新しい視点を得ることができ、充実した交流会となりました。

# 2010(平成22)年度の事業紹介

当財団は昨年の資料館開館20周年の節目を終え、今年からまた新たな気持ちで、平和への思いを次世代につなぐ下記の事業に取り組んでまいりたいと考えております。

1. 大学または大学院に在学する女子学生に対する学資の給与
2. ひめゆりの塔の例祭挙行と塔の管理
3. 出版及び講演会並びに展示会の開催
   ① 2010（平成22)年度発行予定の出版物:『資料館だより第45号』『資料館だより第46号』『年報22号』『感想文集22号』『巡回展ガイドブック』
   ②元ひめゆり学徒の戦争体験講話事業
   ③県外巡回展「ひめゆり　平和への祈り―沖縄戦から65年」開催
4. ひめゆり平和祈念資料館の管理運営
5. アニメ関連作品の製作　①アニメ「ひめゆり」(仮称)の製作　②絵本「ひめゆり」(仮称)の製作
6. 館内増改築工事　①トイレの増改築　②第三展示室の改築
7. 「納骨堂」の改修
8. 伊原第一外科壕の保存活用調査
9. 伊原第三外科壕の保存調査

## 相思樹

### 巡回展という経験

学芸員　普天間朝佳

4月3日から、愛知県で巡回展が始まった。今回の巡回展は、当館にとって館外県外での初めての試みというだけでなく、次世代の学芸員たちが主動した初めての取り組みとしても重要な意義を持っている。

展示内容は常設展をベースにはしているが、学芸員たちが文章を短くしたり、付け加えたりして、いわば次世代の学芸員たちの〝フィルター〟を通した内容になっているのである。

巡回展の準備に当たっては、生存者の証言員と学芸員が時間をかけて議論した。その議論の過程では、証言員によって学芸員の事実認識が修正されたり、逆に学芸員による史料の提示によって証言員の体験を検証する場面が生まれたりした。また学芸員にとっては、議論の場で自ら主体的に発言すること、主張がぶつかり合う中で妥協点を見いだすことの大切さにも気づくことができたと思う。

さらに、今回痛感したのは「ブラッシュアップの重要性」である。ブラッシュアップとは一定の段階に達したものをさらに上の段階へアップしていくために再度練り上げていくことであるが、今回何度もブラッシュアップが繰り返されたことで、結果的にはいい形の仕上がりになったのではないかと思う。

最後に忘れてはならないのは、共催の朝日新聞社をはじめ各開催館、設計・デザインの岡部憲明アーキテクチャーネットワーク、コーディネーターの石川紀子さんたちの存在である。まさに今回の巡回展はこれらの方々との協働と連帯感の結晶であると言える。

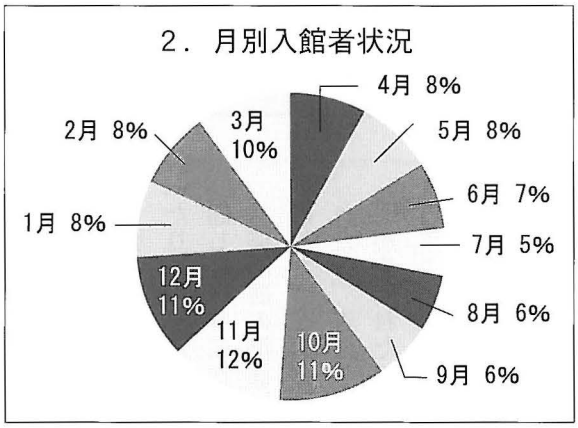
# 統計に見る2009年度

## 1. 総入館者状況

・昨年の入館者は769,852人（前年の816,745人より－46,893人）。1か月の平均入館者は64,154人、1日平均は2,115人。
⇒開館後15番目の入館者数（ただし1989年度は半年間）。
・開館以来21年間の1か年の平均入館者数は814,772人、1日平均は2269.6人
・2010年2月で開館以来の入館者が1700万人を超えた。

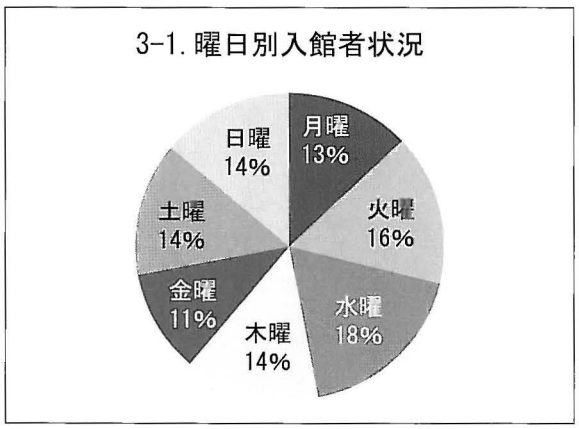
## 2. 月別入館者状況

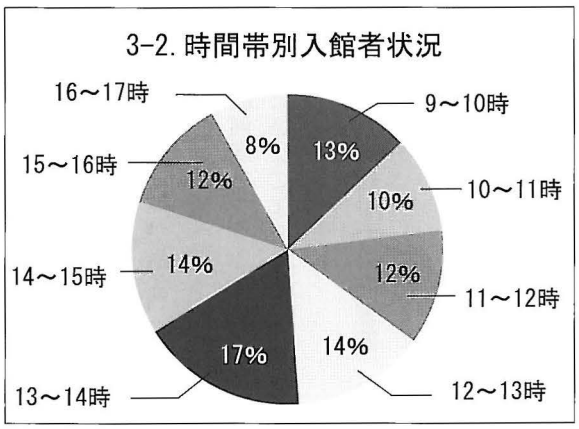
・昨年1年間で入館者の多かった時期は修学旅行の入館の多い10～12月の3か月間。3か月間の合計は265,141人で、総入館者数の約34%
・逆に少ない時期は7～9月。この時期は夏休みで家族づれの姿が目立ち、団体入館が少ない。3か月間の合計は129,934人で、総入館者数の約17%




## 3－1. 曜日別入館者状況／3－2. 時間帯別入館者状況

・曜日別入館者数は週半ばの火・水に集中している。
曜日別：月13%、火16%、水18%、木14%、金11%、土14%、日14%
・時間帯別入館者数：12時から15時までの午後早い時間の入館が多少多い。

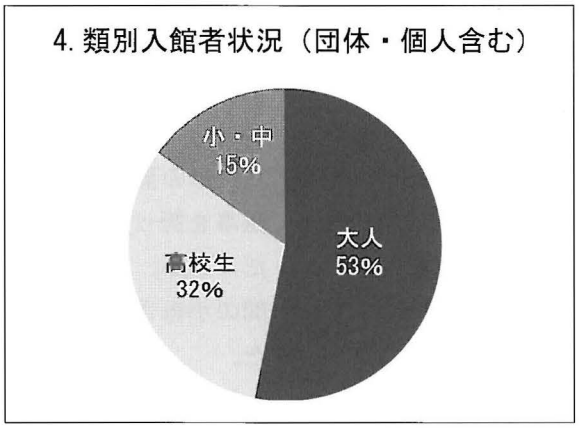


## 4. 類別入館者数

【総数】昨年度の割合は大人が53%、高校生32%（そのうち約97%が団体で来館）、小・中15%（そのうち約73%が団体で来館）。20年間の平均では大人が69%、高校生21%（そのうち約94%が団体で来館）、小・中10%（そのうち約61%が団体で来館）

【団体】昨年度の団体の割合では、特に高校生の割合が高く64%、次いで中学生21%、大人14%、小学生1%となっている。20年間の平均では高校生が56%、大人が26%




## 5. 学校団体の入館状況

・昨年、来館した学校団体は2,344校、327,206人（前年の2,345校、322,543人に比べ－1校、＋4,663人）。内訳は、小学校が93校の4%、中学校が800校の34%、高校が1,451校の62%

・学校団体地域別

＊全体では、関東31%、近畿15%が多い。

＊小学校は、沖縄59%、九州15%、関東12%がベスト3（前年は沖縄63%、九州15%、関東11%）

＊中学校は近畿33%、中国17%、九州17%がベスト3（前年は近畿32%、中国18%、九州17%）

＊高校は関東48%、東海16%、信越9%がベスト3（前年は関東47%、東海16%、東北10%）

・学校団体都道府県別

＊小学校　93校のうち沖縄が55校とダントツ

＊中学校　大阪105校、岡山77校、熊本61校、兵庫59校がベスト4

＊高校　東京200校、神奈川130校、埼玉82校、千葉80校がベスト4

＊全体に占める沖縄の中学・高校の入館の割合は中学2%、高校0.5%

・月別では　10月18%、11月17%、12月18%、5月10%が多く、その4か月間で全体の63%が入館している。沖縄の学校の割合が多い小学校は、11月21%、5月19%、6月18%が多く、近畿や中国、九州の学校の割合が多い中学校は5月34%、4月21%に集中、高校は10月23%、12月22%、11月21%の3か月間に集中している。

## 6. 入館料免除

| | | |
|---|---|---|
| 団体(特別支援学校・一般団体含む) | 116団体／ | 2,408人 |
| | 介助・引率者 | 989人 |
| 修学旅行下見 | 738校／ | 1,973人 |

## 7. 外国人　5,228人

# 仲宗根政善日記抄 (42)

[1979年] 十二月一日

先日、儀間十三さんが、母の十三年忌で帰ったと訪ねて来てくれた。十十空襲の夜、火の海の那覇にはいって行った。二中の裏手にあった大和人墓には、猛火につつまれた二中校からの黒煙がうずまき、その下をくぐりぬけながら、墓石の間をさまよい歩いた。やっと煙のすき間をみつけて、那覇市街を見おろすと、猛火はこの世のものとも思えないすさまじい勢いで音をたてて燃えていた。沖縄の歴史にこんな業火があったであろうか。

朱の瓦屋根のかげろふ春の日に
ものみなよろしわが住める那覇

と山城正忠氏が詠んだ、赤瓦の甍の美しい街が音をたてて、燃えつづけているのであった。松山の大典寺、松山小学校、二高女の炎が高く吹きあげていた。

やっと二中運動場の西側の塀わきにそうて、おりて行った。その一帯の家屋も音をたてて燃えつづけていた。やがて火にかこまれて進路を失ったが、やけつづけている家屋の軒下からぬけて、二中前道路に出た。黒煙の中からわずかに焼け残る家屋が見える。我が家だ。朝空襲のサイレンが鳴りひびいた時は、家族を家庭防空壕にひき入れた。子供らはじっと私の顔をみつめていた。付属国民学校の主事をしていたので、学校をこの空襲に放置するわけにはいけないと、これから学校に出かけると妻に言ったが、返事がなかった。意を決して妻子を壕に置いたまま学校へ出かけたのである。学校の近くの雲雀が丘の古墓で、野田貞雄校長とご真影を奉持して、墓の入口から、眺めると、妻子のいる城岳の上に超低空で敵機から三つ四つとかぞえられる爆弾が投下されるのが、はっきりと見えた。地ひびきがつたわり、眼もくらみそうになった。妻子はどうなったのだろうか。安全でいてくれたであろうかと、焼け残った家へと、焼けた隣家の塀を跳びこえて我が家へ近づいた。防空壕の中をのぞくと、食器や布団毛布が散乱していて、家族はいなかった。そばでいぶりつづけているのに気がついた。毛布が燃えている。ひっぱって見ると、人間の頭蓋骨に似た白いのが出た。わが子の頭ではなかろうかとぞっとしたが、水筒らしかった。桑の木がもえて、家の軒に燃えうつりそうにしている。さっそく消しとめて、玄関に立った。母の墓前に手を合わせるようにして、妻子の無事を祈った。いったいどこへ避難して行ったのだろうか。あるいはいつもお世話になっている儀間の小母さんの家かもしれないと、すぐかけつけた。

儀間の家はがらあきだった。裏手の墓のところに廻ると、みんな墓の中に避難していた。家の者は来ていないかと尋ねると、儀間の小母さんは、墓の入口から首を出して、ここには来ていませんがという。ますます不安がつのった。

儀間十三さんに尋ねると、その時は、「私もいっしょにあの墓の中にいましたよ」という。

そばで話を聞いていた妻が、「あの時、紀子は生後十ヶ月で、民子が四才、正子七才だった」という。妻子は、隣り上間の家族と仲栄(ママ)間に避難したらしい。風のうわさで、仲栄間だと聞いて、一軒一軒尋ね廻った。紀子をおぶり、民子の手をひいて、正子を歩かせて、あちらこちらさまよい、上間の家族と国頭へとのがれて行った。

あれから妻子とは別れ住むようになった。里の家族ともわかれて、辺土(ママ)野の上島に民家の一室をかりて疎開していた。十二月十五日が紀子の誕生日であった。祝ってやる食糧もなく、蘇鉄の実をご飯にまぜて誕生日を迎えたという。妻子四名は、山中に避難した。木がうっそうとしげり、そばに岩があり、清水が流れていたという。迅は宇土部隊が、解散になって、山に尋ねて来ていっしょになった。竹を切り、小屋をつくり、床も竹であんで風流なかっこうでもあったという。清水がそばを流れていた。

ちょうど亡くなった父の四十九日だったので、

母のいる小屋を訪ねた。数名の米兵が突然やって来て、東顕に銃をつきつけた。君の治療をしている日本の兵隊がいるはずだ。彼の居所を教えよとせまった。東顕は蒼白になりぶるぶるふるえた。家族の者たちも殺されるにちがいないとふるえた。東顕は命令の通りに、治療している兵隊のところへと、米兵を案内した。いっしょにいた兵隊がにげ出したのを後から銃殺してしまった。治療していた兵隊は、素直に抵抗もせず米兵に投降した。東顕はその負傷兵を担架にかつがされた。雨はふりしきった。妻子たちもその後についた。紀子を背負い毛布をかぶせて歩いたが水をふくみ敏代の体はすくみそうになり、やせこけた紀子の唇は紫になった。雨はますますふりしきる。民子もつまづきながら山をおりて行った。ひっぱられて行ったところは、大宜見田嘉里部落だったという。

私ははじめて、紀子が十十空襲のとき、まだ誕生もむかえない十か月の時だったことを、妻から聞いて知った。直也ちゃんが、誕生日を越して二か月になる。毎日だっこして庭に出て、仏桑華の花を眺めさせると、ため息をつきながら花に見いる。この年頃の幼児をかかえて、妻が山中をのがれ歩いたのである。

何もなかったようにして子供らは仕合に送っている。戦争の苦難がこの子供らにもつきまとっていたのである。一人も犠牲になることもなく、あの悲惨な戦争を凌ぎえたことは何という仕合であろうか。しかし、多くの人々はほとんどが、沖縄戦では肉親を失っているのである。あらためて生命の尊さが感じられる。

一昨日、富村真演君が急逝して、午後二時から大典寺で告別式があった。同窓会館で、四時から打合わせがあったので、久しぶりに訪れた。慰霊の間になくなった生徒の氏名が記されて祭られている。訪ねる者はすべて香をたき鐘をならして丁重にとぶらってくれている。

源ゆき同窓会長が、今すぐというわけではないですが、三十三年忌もすんだことだし、これら生徒の霊を真教寺にうつして弔ってはとの話をされた。次第々々遠ざかり行くさびしさを感じた。あるいはそういうことになって行くのかも知れない。しかし、出来ることなら、同窓生が一人でも残っている間は、同窓会の一室に、慰霊の間をそのままおいて丁重にとぶらってあげたい。世代がかわり、誰も知る人もいなくなったときは、お寺の中におさめられなければならないのであろうが、ひめゆり同窓会の名のある間は、今のままで弔いをつづけて行きたいものである。同窓生も一人去り一人去りして行く。ひめゆりの乙女たちも次第に遠ざかって行く。たえられないさびしさがある。

朝日新聞社と沖縄タイムスの共催で、ひめゆりの乙女展を来年七月十七日から、約半年間、全国で開催しようという計画がすすめられつつある。あれから三十五年たち、沖縄戦は、世の人々から忘れ去られようとしている。沖縄戦を風化させることなく、軍国主義へと急傾斜して行きつつある潮流をくいとめようというのである。乙女らの体験が、もしこれをくいとめるに役立つものならば、何とか役立てたい。

そんな気持ちで、想思樹［相思樹会］の幹事役の者たちを集めて、話し合いを持った。皆がよろこんで協力してくれることになった。各自のもっている力を平和のためにささげたい。

※読みやすさに考慮して、字句を補った箇所がある。
　また、明らかな誤字は改めた。
※［　］は編集者による注釈。

# 本　棚

（元琉球大学教授　仲程昌徳）

## 『ひめゆり平和祈念資料館資料集３　ひめゆり学徒隊』

これまで刊行されてきた太平洋・アジア戦争関係図書を鳥瞰し、その変化を考察した書が現れた。成田龍一の『「戦争経験」の戦後史　語られた体験／証言／記憶』である。「戦争の経験を問う」シリーズ13冊の最初を飾った同書は、表題から分かるとおり「戦争経験」が、「体験」から「証言」そして「記憶」へと変化していく過程を跡づけたものであるが、その過程で登場してきた被害・加害の重層性、帝国・植民地認識・慰安婦問題等に触れ、「戦争経験」の深化を確認していくとともに、書き換えや記憶違いの問題などにも筆を伸ばしていた。

同書はそれだけにすぐれた「戦争関係図書案内」ともなっているが、「戦争関係図書」とりわけ「証言記録」を読むのは、そう簡単なことではない。そのような思いを深くさせるものの一つに『ひめゆり平和祈念資料館　資料集３　ひめゆり学徒隊』がある。そこに「ひめゆり学徒隊の教師・学徒の死亡状況」一覧が収められているが、その「死亡状況」を「記述」した箇所など、特にそうである。

例えば「5月中旬と5月25日の撤退の日に負傷。2度目は足に重傷を負ったため動くことができず、沖縄陸軍病院に残され、その後死亡。死亡状況は不明」といった箇所。彼女の「死」を記述するのに、「その後死亡」で止めてなんら問題はないはずなのだが、なぜ「死亡状況は不明」と付け加えたのだろうか。

沖縄陸軍病院の撤退について記したものの一つに西平英夫の『ひめゆり学徒隊の青春』（のち『ひめゆりの塔　学生隊長の手記』と改題）がある。西平はそこに、撤退にあたって「軍のほうでは、「軽傷者は第一線に送り返す。独歩患者は極力自力によって転進させる。重患は処置する」と決定された。処置の仕方としては薬物によるほかあるまいと話し合われ、飲まない者があっても飲んだことにして置くとのこと」であったと書いていた。

「資料集3」の「死亡状況」を担当した方が、そのことを知らなかったはずはない。重傷患者に配られた撤退時の「ミルク」については、多くの証言があり、誰でも知っている事実であるといっていい。それからすれば、「死亡状況は不明」なのではないとも言えるのである。

「その後死亡」のあとに、「死亡状況は不明」と付け加えたのは、戦場での出来事については、自明と思えることでも、断言できないことがある、といったことを知ってほしいということなのだろうか。それとも、あえて「死亡状況は不明」と付け加えたことで「ミルク」という語りがたい問題があったということを知ってほしいということなのだろうか。

あと一つよく似た事例で「6月18日、壕が馬乗り攻撃を受けたとき、膝を負傷。その後生徒は脱出するよう命令が出たが、負傷者は軍が面倒を見るということだったので、壕に残った。以後消息不明」というのがある。彼女について『墓碑銘―亡き師亡き友に捧げる―』（「ひめゆり平和祈念資料館建設期成会資料委員」編集）は、「壕に残った」の後「その後死亡。死亡状況は不明である」と記していた。それが「資料集3」では「以後消息不明」となっている。一方は「その後死亡。死亡状況は不明である」と、両著同じ記述になっているのに、他方は「以後消息不明」へと変わっているのは、何故なのだろう。何故、同じような「記述」ではいけなかったのだろうか。

後者の生徒に関する「記述」について言えば、「壕に残った」と「以後消息不明」との字間には深い闇がある。その闇は「軍が面倒を見るということだった」と関わっているはずだが、それは、どう読んだらいいのだろうか。それにしても、「死亡状況は不明である」と「以後消息不明」との隔たりはあまりに大きい。

そのような隔たりを埋める読みは読者にゆだねられていると思えばおもうほど、戦争記録を読むことの困難さを痛感せざるを得ないのである。

# 声

## これからも平和のありがたさを語り継いでいってほしい

千葉県　30代　女性

前略

千葉県在住30歳代女性です。

沖縄を訪れるたび、資料館に足を運ばせて頂いております。

県内観光地を巡っている間はワクワクと楽しい気持ちで時間が過ぎていくのですが、この地は、他の地とは全く違い、一歩足を踏み入れた途端に自然と涙がこみあげ、館内を巡るにつれて、その涙が自然に溢れてくるのです。

花だんにはお花が咲き誇り、穏やかで明るい雰囲気が漂っている現在ですが、数十年前には、私たちには想像もできない様な、壮絶な毎日がくり広げられていたかと思うと、本当に切なく悲しい気持ちになります。

教師になることを志し、同じ夢に向かって頑張る友達と互いに励まし合い、ごく普通に学生生活を楽しもうとしていた矢先に戦争が激化。教師になるという夢からは遠くはなれ国の為にと昼も夜もなく、懸命に働いていたという話しを聞く度に、戦争教育の恐ろしさと、何気ない普通の生活が、どれだけ幸せなのかを実感させられます。

私たちは日々繰り返される普通の生活の中に物足りなさを感じてしまったり、ついつい仕事に対する不満をぶつけてしまうのですが、それも全て平和な現在に生まれることが出来たからこその勝手な主張なのでしょうね。

私は就きたかった仕事につくことも出来、幸せであるはずなのに‥‥。戦争によって、夢半ばで命を絶たれてしまった方々を思うと本当に恥ずかしくなります。

お話の中で、資料館を建設するにあたって、部屋にかけられた犠牲者の方々ににらまれているように感じた‥‥とありました。

しかし、私はそうは思いません。自分たちの分まで生きて欲しい。後世に悲惨だった時代の真実を語り継いでいって欲しい。そして自分たちがこの地に生きていたことを証明していって欲しいと心から願っていると思うのです。

辛く思い出したくない時代のことを語り継いでいくことに対して、相当な決心をされたことでしょう。

自分だけ生き残ってしまったという負い目や申し訳なさを感じることなくこれからも平和を訴え、平和であることのありがたさを語り継いでいって下さい。

2009年も残すところ後数日。この手紙がそちらに届く頃には2010年になっているかもしれませんね。

皆様のご健康と戦争が世界中から無くなり　全ての人々が笑顔で暮らせる日が訪れますよう、心から願っております。

# 資料館ガイド

## ◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前９時～午後５時　閉館　午後５時25分
②休 館 日　年中無休
③入 館 料　大人￥300　高校生￥200　小・中学生￥100
　　団体20名以上　10％引き
④交　　通　那覇から糸満市行きのバス㊾で約30分、さらに糸満バスターミナルから㊷㊼㊽のバスで約15分、ひめゆりの塔前バス停下車。

## ◆多目的ホール利用の手引き

①多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約30分）や証言ビデオ（25分）を視聴することができます。
②ホールの予約は、１年前（その月の１日）から受付します。
**→例：来年10月31日までの受付は、今年10月１日受付開始。**
③講話については、１日の回数が２回（１回40人以上）となります。
**毎週月曜日、講話は休みで、ビデオのみの予約受付となっておりますのでご了承ください。**
④講話の時間帯　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00
ビデオの時間帯　09：00　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00　16：00
**⑤ご予約の際は空き状況をお電話でご確認ください。受付は先着順で、電話もしくは資料館窓口でのお申し込みとなります。。**
**いずれの場合も確認の為、指定申込書にご記入の上ＦＡＸ又はＷＥＢにてお送り下さい。**
⑥ホールの収容人員は200人（席）です。
⑦ホールの利用は、入館していただく場合に限ります。また、講話・ビデオ以外には使用できません。
⑧講話は原則として当日の当番の証言員が対応します。講師謝礼及び施設使用料等は頂いておりません。
⑨年末年始（12月30日、31日、１月１日～３日）・旧盆（旧暦７月13日～15日）は、証言員が休みの為講話はできません。また、慰霊祭前後（６月21日～24日）は、ビデオ上映会を行いますので、予約はできません。
⑩ホール予約の方は、来館当日、窓口にその旨お知らせ下さい。

## ◆ＶＴＲ室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。
◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25分）
◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30分）
◇「ひめゆり学徒の戦後」（33分）
◇「戦火に消えた21の学園」（26分）

ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第45号
2010（平成22）年５月31日発行
編集・発行　（財）沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館
資料館　〒901-0344　沖縄県糸満市字伊原671-1　☎098-997-2100
財団事務局　〒902-0067　沖縄県那覇市安里388-1　☎098-884-1115
URL　http://www.himeyuri.or.jp/